

# 童話 王女の猫の話

— カレル・チャペック —

1011

## 五

さて魔法使ひは見事にシドニー・ホール君に捕まつてしまひましたので、今度はいよく盗まれた猫を取返す裁判が開かれることになりました。

高いテーブルの向ふ側には嚴格な名高い裁判長閣下が、デッブリ肥えた體を威儀を正して坐つて居ります。被告席には魔法使ひが手を縛られたまゝ席につきました。

『不埒者、立て!!』裁判長は雷様のやうな大聲で申しました。其方は當國の生れ、當年三つで一歳に相成る王様の小猫スーザンミやらを盗み三つたご言ふことであるが、しかみ左様であるか、それとも何ぞ異議があるか。』

『しかみその通りで御座います。』魔法使ひは低い聲で答

へました。

『嘘を申せ、不届者めが。』又しても雷が落ちました。『其方の申すことなご一言も信用しはせん。證據固めを致す必要がある。コラコラ者共、證人を呼び出せ、エート、最初は王女様から御連れ申上げるがよい。』

で人々は證人に王女様を御連れ申しました。

『これはこれは王女様、裁判長閣下は急に可愛らしい猫撫聲を出して申しました。』この不届者が王女様の猫を盗み取り出したので御座いませうな。』

『エ、そうだわ。』王女様は御答へになりました。

『この不埒者めが。』又しても大雷であります。『さてこそ貴様は有罪さ決つた。だが一體、何故あつて盗んだのぢや

中野好夫

『イエ、實はあの猫が私の頭の上に落ちかゝつて參つたので御座います。』

『又しても嘘を申す。』裁判長は魔法使ひを頭からきめつけるミ、クルリミ王女様に向き直つて、これはまたひどくやさしい聲で、『王女様、王女様、彼奴はさうして王女様の御猫を盗み取りましたので御座りませうな』。

『あの人の言つた通りだわ。』王女様は御答へになりませんでした。

『これややい、嘘吐き。其方がぎの様にして猫を盗みさつたか、よく相分つた。だが何故あつて盗んだミ申すのぢや』。

『イエ、その猫は實は落つこちまして、可哀相に足を折りましたもので、私は繃帯で出してやつて、なほしてやらうに存じまして、外套の下に抱いてつれて行つてやつたので御座います。』

『大それた奴ぢや、其方の申すこゝなご、みんな眞赤な偽りぢや。あゝ、證人を呼び出せ。居酒屋の亭主をこれへ呼

そこでまた人々は證人を連れて參りました。

『これや亭主。』裁判長閣下は聲高に申しました。『其方はこの犯人に就いて、ぎのやうなこゝを承知致して居るか』。

居酒屋の亭主はおそろしく申上げました。『これはこれは裁判長様。イヤほんの、この御方は手前の店へ一寸御出でになりましたな。なんでも外套の下から黒い猫を一匹御出しになつてな、足に繃帯をしてやつて御出でのやうで御座いましたつけが』。

『フーム、多分その方の申すこゝは嘘であらう。だが、コレコレ、それから此の男はその猫をいかゞ致した』。

『それからで御座んすよ、』亭主は申しました。『その猫をボーミ放しておやりになりましたな。猫の奴め、喜んで逃げて行つてしまひましたよ。』

『コレやい。獸物いじめを致す不届者。』裁判長は魔法使ひに躍りかゝらんばかりに、怒鳴り立てました。『貴様は猫を逃がしたのだな。猫は逃げてしまふた。今何處に居るそ

の王様の猫は』。

『イヤモウ多分あの猫の生れた家へ歸つて居りませうと存じます。』魔法使ひは申しました。『裁判長様、それが猫の



天性で御座いますよ。』

『おのれこの恥知らずめが!!』裁判長は獸のやうに唸りました。『貴様はこの俺に説法致す所存か。これはこれは王女様、』又しても王女様の方を向いて、ひびくやさしい聲で

申しました。『王女様御寵愛のその小猫ミやはまついかほごの値打のもので御座いませうな。』

『そうネ、御國を半分やらうと言はれても、妾、スーザン人を人にやらないわよ。』

『コラ聞いたか、さうだ、不埒者め。其方は王國を半分盗み居つたも同然ぢや、あゝ、勿論死刑ぢや、可哀相ぢやがな。』

それを聞くミ王女様は魔法使が何だか可哀相に思はれて仕方がありませんでした。ですぐに、  
『そうネ、妾、お菓子一片でスーザンをやつてしまつてもいゝわ。』

『ホホウ、御菓子一切の値打ミ申しますよ、一體王女様……』

『そうネエ、胡桃の御菓子なら壹錢、莓の御菓子なら貳錢、クリームの御菓子ならば參錢……』

『それで王女様はスーザンの代りにごの御菓子がよろしく御座いませう。』

『それや、妾、クリームの御菓子がいゝわよ。』

『コレコレ、被告。してみるに其方は参錢がものを盗んだ  
さまづ同然さいふわけぢやな。では法律によつて、エート、  
三日間入牢申しつける。サア、サア、三日間牢屋へ参れ、  
アーン、この不屈不埒不所存千萬の悪黨め。こころで王女  
様、』又しても王女様の方を向いて申しました。『誠にさうも  
王女様の御發明御賢明な御言葉、千萬有難う御座ります。  
さうか陛下によろしく御申傳へを願ひ上げます。』

そこで人々は魔法使ひを牢屋へつれて参りました。そし  
て黴の生えた一片のバンミ、水差しに腐つた水を一杯さあ  
てがつて行つてしまひました。それでも魔法使ひはじつこ  
坐つたまゝ、ニコく笑つて居りましたが、その二つの眼  
は段々美しく輝いて参りました。丁度真夜中頃でありまし  
た。魔法使ひはムクく起き上るに、サツミ手を一振り  
致しました。サア、するささうでせう、それは美しい音楽  
が聞えてくるし、まるで何千さいふ花の上を吹いて來る風  
の様に、室の中の空氣まで何にも云へない芳い香りで一杯  
になりました。それから御覽なさい、青い物一つ見えなか  
つた牢屋の庭に今を盛り咲き誇つた薔薇の樹がヒョト飛

び出して來ました、眞白い百合の花は一齊に頭を上げて銀  
色の御月様を見上げました。バンジーや鈴蘭の花壇がアツ  
さいふ間に一面に花を着けました。ガマズミや芍薬の花は  
重そうな頭を風にユラユラ揺られてゐました。サンザシ  
の木は身體一ぱいに薄桃色の衣を着け、一番高い梢では夜  
鶯が咽喉一ぱいに歌をうたつて居ります。

するに牢屋の中では、死刑囚の人殺しがフト眼を覺まし  
ました。硬いベットに眠つてゐた重罪犯の男も眠い眼をこ  
すりく起きて参りました。刑期をつめてゐる悪漢も驚  
いて起き上りました、盗人も驚きのあまり叫び出しました、  
詐欺師も何が何だかわからないやうな顔をして兩手を組合  
はせました。さいふのは、あの冷いジメくした牢屋の壁  
がすつかり廣々打ち開けて、圓天井のある美しい圓柱  
が見える限り竝んでゐるではありませんか。そして薄汚い  
囚人の寢床はまるで雪のやうに眞白な亞麻のシートで包ま  
れて居ります。掛金も門もすつかり失くなつてしまつて、  
五六段ばかりの石段が眞直に花園に通じて居るではありませんか。

『オイ、ビル公』人殺しが重罪犯の男に申しました。『寢てるのかい』

『インヤ、起きてるぜ』重罪犯の男は申しました。だが變な氣がして仕様がななんだ。まるでこゝ何だか牢屋に居るやうな氣がしないんだがなあ』。

『オイ、皆の衆、悪黨が大聲で叫び出しました。俺あもう死んじまつて、天國へ來てるんぢやなからうかな』。

『ナニ、天國だミ』詐偽師が申しました。『俺達なんぞに天國があるかい、一體。だが實はそういふ俺もまるで天國にでも居るやうな綺麗な夢を見てたころなんだがな』。

『夢ぢやねえ』盗人が申しました。『眞實ほんのこゝだぜ。ホラ見ろ、百合の花だ。あいつが一本欲しいもんだなあ』。

『お取りなさい』。突然やさしい、それでゐて嚴かな聲が聞えました。ふみみるこあの魔法使ひが眞白な衣を着て皆の眞中に立つてゐるではありませんか。『みんなお前方のものだ』。

『ハア、お前様はこゝの看守さんですかい。』こゝ重罪犯の男

がおそるゝ訊ねました。

『私もお前方ミ同じ囚人だよ。』魔法使ひは申しました。

『お前方ミ全く同じ人間だよ。こゝの花園は私達のものだ。あの木蔭の御馳走のテーブルも私達のためだ。あの夜鶯が歌つてゐる、あの薔薇の木が花を着けてゐる、あれもやつぱり俺達のためだよ。サア、みんなおいで、一緒に晩飯にしようぢやないか』。

でみんなの者は立派な御馳走の一ぱい並んだテーブルに坐つて、いよゝ御馳走をはじめました。魔法使ひは一同にすばらしい御馳走をこり分けてやつたり、葡萄酒をついでやつたり致しました。丁度魔法使ひが詐偽師の杯に葡萄酒を一杯注いでやつた時でありました、詐偽師は俯伏したまゝ、蚊の泣くやうな小さい聲で申しました。『イエ、イエ、私は結構で御座いますから』。

『ホウ、何故あんたは否やなのかな。』魔法使ひは訊きました。

『イエイエ、私のやうなものがさうしていたゞけませう。』

私のやうに澤山の人をひさい目にあはせました人間が、こゝ

うしてそんなお酒を頂戴出来ませう。』

するま魔法使ひの眼が何かキラリミ光つたやうでありました。でも何んにも言はないで、次ぎ次ぎへま葡萄酒を注いでまはりました。丁度人殺しの順番になつたまき、その男は急に手をブル／＼さふるはせて、杯の眞赤な葡萄酒が二滴三滴テーブル掛布の上へこぼれました。

『あゝ、この葡萄酒はさうしてこんなに血の色を思ひ出させるんでせう。罪もない人の血を流しましたこの私、私はもう淺間しい極悪人で御座います。』

魔法使ひは何んにも申しませんでした。でもその眼は一層キラ／＼光りました。その次に例の悪黨に注いでやらうま致しますま、その男は急に叫び出しました。『私はこのお酒をさうすればよいので御座います。私は面白半分他人様を打つたり、他人様の足を踏にして面白がつてみたり、折角親切に差し出してくれた手を打つてみたり、私をほんまに愛して下さる人々を苦しめてみたり……』

魔法使ひの顔はいよ／＼輝きわたりました。がそれでも何一つ言はないで、今度は盗人に向かつて、一番美味しそ

うな果物のお皿をすゝめました。』お取りなさい、いゝですか。これはあなたのものなんですから。』そう心からやさしく申しました。

『私は人様の物を盗んだ者で御座います。でこれはたまへ私のものかは存じませんが、何卒御取上げを御願ひ申します。』

魔法使ひはニコリ笑ひました。そして今度は重罪犯の男の所へやつていつて、『ではあなたはさうですか。美味しい果物です。』

『イエ、イエ、私は私に親切にやさしくしてくれる人々の家に火を放けたおそろしい人間で御座います。その人達は可哀相に今は乞食になつてしまつて、一片のパンを他人様からいたゞかなければならないようになってしまひました。あゝ、私のために苦しんでゐる人々に一口でもいゝから、この果物をやりたいもんで御座います。』

するま魔法使ひの眼はまるでお星様のやうにキラ／＼光りました。そしてスツミ立上るま、『皆さん、長い間あなた方は美味しいものも食べない、心に喜びさいふものも知ら

なかつた。何故食へて、飲んで、楽しくなつていけないことがありませう。サア、さうぞおあがりなさい、あなた方のものなのです』。

たゞ丁度その時でありました、庭の方からまるで澤山の足音のやうなものが聞えて参りました、そしてみる／＼うちに澤山の可哀相な貧しい、跛な、乞食の群がゾロ／＼ゾロ／＼現はれて参りました。

『アツ!! あれは私がひぎい目にあはせた人達だ』。ミ詐偽師が叫びだしました。

『あゝ、あそこに私が殺した人が居る。』人殺しは半分おそろしいやうな、そして半分うれしいやうな大きな叫び聲をあげました。

するゝ悪黨もつゞいて、『さうだ、あの怪我をして跛を曳いてゐる人達は私がひぎい目に合はした人達だ』。

『おゝ、私が盗みをした人達だ。』盗人はもう嬉しくてたまらないさいつた風に叫び出しました。

『さうだ、この乞食達は私が火を放けた家の可哀相な人達だ』。

その時でありました。詐偽師はツカ／＼立上るゝ、御

馳走やら葡萄酒やらを自分がひぎい目にあはせた貧しい人達のミころへドン／＼運びはじめました。人殺しは人殺しでテーブル掛布を小さく裂いて、自分が殺した人の前に跪いて、流れ落ちる涙でその傷口を綺麗に洗つてやつて、すっかり繃帯をしてやりました。悪黨は悪黨で、自分が怪我をさせた人達の傷口に葡萄酒を流してやりました。盗人は盗人で、テーブルの金の裝飾かざりや、銀の裝飾かざりをすっかりかき集めて自分が盗みをした人達に無理矢理に取らせました。それを見るゝ重罪犯の男は俄にわつ／＼泣き出して、『ああ、私はあの貧しい人達に何を上げればいゝのだ、私が何にもかもすつかり取つてしまつたあの人達に、』そしてこの男は大急ぎで、庭中の花をすつかり摘みこつて、その乞食達の腕に押しこむやうに抱かせました。

詐偽師が自分のひぎい目に合はせた人達に御馳走ゝ葡萄酒をわけてやり、人殺しがその可哀相な犠牲いけにえの傷口に繃帯をしてやり、悪黨がその怪我をした人々をいたはつてやり、盗人は盗人で、自分が盗んだ人達かざりに裝飾の金銀を集めてや

り、重罪犯の男は男で、乞食達のボロくの着物を花でいっぱい飾つてやるに、サアもうあそこには自分達は食べるものも、見るものも、何一つ残つて居りませんでした。でも一同はめい／＼のお客様を宮殿の中へ案内して入つて、眞白なベッドの中へ靜かに寝かせてやりました、そして自分達自身はその傍に、堅い床の上に横になつて寝みました。

魔法使ひはたつた一人、靜かに手を組んでいつまでも庭の中に立つて居りました、二つの眼はまるでお星様のやうに美しく輝いて居ります。牢屋の中には靜かな靜かな眠りがそつ／＼忍び足に降りて来て、やがてすつ／＼物音一つ聞えなくなつてしまひました。

する／＼突然扉をたゞ／＼大きな物音がして、獄卒が入つて参りました。

『起きろ、起きろ』獄卒は大聲に怒鳴り立てました。『貴様達はもう今日で三日も眠りつゞけてゐる、それでさうしても起きないのだ。』

囚人達はハツ／＼ばかりに飛び起きました。起き上つてみるに、自分達はみんなあの堅い汚いベットから降りて床の

上に寝てゐるのに氣が付きました。そしてあの美しい柱の行列はやはりもこのジメ／＼した牢屋の壁に歸つて居り、あの一ぱい花を着けた樹も草も一つ残らず消えてしまつて居ります。たゞ一つ残つてゐるものは、地面の上に二片三片、薔薇も百合の花弁が淋しくこぼれてゐるばかりでありました。

『俺達は三日の間眠りつゞけてゐたんだ』人殺しは驚いて叫びました。それにつゞいて重罪犯の男も叫びました。

『何んだつて、あゝ夢だつたのか』

『看守さん、盗人は不思議さうにたづねました。俺達の外に誰れもこゝに居なかつたかね。』

『居たにも、』獄卒は答へて申しました。『王様の猫を盗んださいふあの男が居た。あいつは三日の間ズツ／＼室の眞中に身動き一つしないで立つてゐた、あいつの眼はまるで星のやうに輝いてゐた。こゝろが今日刑期が終るに、フツツリ居なくなつてしまつたのだ。おかしな奴だつた。そうだ、そうだ、それにあいつは例の魔法の術で、今日も消えてなくなるお土産に、裁判長閣下のお耳をまるで驢馬のや



うにピンミ長くしてしまつたさいふのだ。だが、さうでもない、貴様達は、サアサ起きろ、起きろ。』

そんな風にして、牢屋の囚人達にはまたしてもいつもの定まりきつた一日がはじまりました。だが何一つ變つたところがないさいふわけではありませんでした。あの水差しの腐つたやうな水がいつもく上等の葡萄酒のやうな味が致しました。微かひだらけのあのバンが、みんなの口に入るか入らないかに、すつかり何とも言へない美味しいバンに變つてしまひます。そして時々思ひだしたやうに、牢屋の中を美しい花片が一片二片風に乗つて舞ひ降りて参ります。夜は夜で、みんなが寝る時になるまで、汚いベットがすつかり眞白なシートで包まれてしまひます。毎晩、毎晩、靜かな靜かな眠りが牢屋にソツミ降りて來て、苦しみも悩みもない平和を持つて來てくれました。

(つゞく)

(九八頁より)  
疊数は中數九・六疊さいふ貧弱な數であつて、此の狭い家屋の中に多數雜居せねばならぬさいふ境遇から不良傾向が醸し出されて來るのである。

以上家庭の職業並びに經濟的關係が子供の知能、性格に影響する事實を述べたが、その他家庭の影響として親の精神的感化さいふものを忘れてはならぬ。今之に就て述べる餘裕はなくなつたが精神的に優れた親の感化さいふものは上述の物質的、社會的な不備を補つて餘りあるものであつてこの點を没却して物質的な環境の改善のみを考慮するが如き政策は眞の教育に云ふ事は出來ないのである。此の親の精神的感化、即ち健全なる家庭を第一義として更にそれを補ひ、子供をより幸福に導く手段として家庭的環境の改善を企圖して行かねばならない。

大阪毎日新聞が此の正月、この世の世紀といふ大見出しで、「世界幼稚園巡り」を連載してゐるのは嬉しい。それもニューヨーク、パリ、モスクワといつた風に、各地の特派員の筆になつてゐることは、記事としての價値を高めてゐると共に、此のテーマが大阪本社編輯局で特に選ばれたものであることなうかやはじめて尙ほ嬉しい。幼稚園のことが斯うした記事として大新聞で取扱はれることは、幼稚園の教育的意義と共に社會的意義の普遍的認識が加はつたことを立證するもので、此の上もなく嬉しい。殊にその一つ一つの寫眞が流石にそれだけの幼稚園のランドコロを捕へてゐるのも嬉しい。さて「世界幼稚園巡り」であるからには我國のものも入れられる筈と思ふが……それはこの特派員を煩はしたらいだらう。(S.K.)